

アカデミック・ライティングの困難に対処するための情意的特性とは
—専門知識の不足への対処に焦点を当てて—

Dispositional Traits for Coping with Academic Writing Challenges:
Focusing on Difficulties Arising from Limited Specialized Knowledge

小森万里, 大阪大学
Mari Komori, The University of Osaka

1. はじめに

日本の大学院に留学している大学院留学生、特に文系の学生は日本語による論文作成が求められる。論文を書き上げるためには、たとえば、二通ほか (2004) でアカデミック・ライティング (以下、AW) の構成要素として言語 (学術分野共通の語彙・表現・文型・文体など)、技能 (アカデミックな文章の作成プロセスや情報収集・アウトライン作成・引用などのスキル)、基礎 (問題意識・論理的思考・客観性など)、専門 (専門知識や専門用語、専門のライティングに関する約束事など) という 4 領域が挙げられているように、言語面だけでなく、スキルや思考力、専門分野の知識などさまざまな面での発達が必要となる。そのため、第二言語の日本語で論文作成をすることになる大学院留学生の場合、日本語を母語とする大学院生以上に多くの困難に直面することが予想される。

また、大学院留学生のレディネスや授業内での様子から、上述した 4 領域を一定程度持ち合わせているとみられる学生であっても、論文作成に行き詰まり、研究の途中経過を指導教員に見せに来なくなるなど心配な様子がみられる場合がある。鹿毛 (2013) は動機づけを規定する要因には認知、感情、欲求、環境の 4 要因があると述べているが、この 4 要因すべてが同時に満たされることは必ずしもたやすいことではないと思われる。例えば認知面で「論文を書き上げることは自分のためになる」と認識しており、欲求面で「論文執筆を通して学位を取得したい」などの期待があっても、日本語で文献を読まなければならないと思うだけで不安を感じるといった感情面や、経済的困難や国にいる家族の病気等の環境面により論文作成行動がとれない場合もあるだろう。Driscoll and Wells (2012) がライティングに必要とされる要素として注目すべきは情意的特性であるとしているように、論文作成過程で躓きがあっても、それに対処し、論文を書き上げるためには、情意的特性の発達が必要なのではないかと考えられる。

そこで、本研究では、論文作成経験のある元大学院留学生にインタビューを行い、論文作成過程での困難に対処するためにどのような方略が使われたのか、また、その方略を可能にする情意的特性とは何だったのかについて検討する。

2. 先行研究

2.1 大学院留学生が研究を進めていく上での困難

大学院留学生が研究を進めていく上での困難については、ゼミという授業形態に不慣れなために慎重な授業参加になること (黄 2015)、研究に対する認識不足や専門知識の不足による不安や批判的コメントから受ける苦痛 (胡 2016、馬

場 2019)、レディネスや学習背景の影響による不安(田 2019)、研究効力感の喪失や研究コミュニティの希薄さによる孤立感(園田 2009、郭 2019)など多くの先行研究がある。また、後藤ほか(2024)では、大学院生にとっての AW 不得意の要因について、他者からの評価の根拠や指摘の意図がわからないこと、内容を表現するための方略がないこと、型にはまった制約の多いスタイルだという AW に対する負の印象があることなどが挙げられている。このように、大学院留学生が研究を進めていく過程での困難には、教育制度、研究に対する認識、専門知識、学習背景、人間関係構築、情意面、他者評価、方略、AW のイメージなどさまざまな面が関わっているといえる。

論文執筆過程での困難についての量的研究では、小森(2025a)が、日本語で学位論文作成経験のある日本語非母語話者 120 人を対象に論文作成過程での困難について調査をしている。その結果、各領域で困難度が高いと多くの回答があったのは、論文にふさわしい日本語、日本語での的確な表現、先行研究の適切な引用、問いの設定、論理的思考、批判的思考、専門知識の不足といった AW の 4 つの構成要素(二通ほか 2004)に関わる項目に加え、不安、心理的落ち込み、自信喪失などの情意面の項目であった。また、自由記述式回答では、「専門知識の不足」により生じた問題について、研究の意義や独自性を示すこと、理論・分析の枠組み選定、実験のデザイン、研究方法の示し方、考察の深さなど、その記述が多様であったことが指摘されている。日本語で専門知識を習得していかなければならない大学院留学生にとって、日本語を母語とする大学院生以上に、その困難は一層大きいものであると思われる。

2.2 大学院留学生の論文執筆過程での困難への対処

2.1 に挙げられたような困難に対し、大学院留学生がどのような対処をしているかについて調査した研究には小森(2025b)がある。小森(2025b)は、Kuhl(1985)とコーノ(2001/2006)の意志的制御方略を援用して分析を行い、困難への対処には、困難を感じている領域の力を伸ばしたり不足している力を補ったりする直接的な方略と、躓いたり努力が報われなかったりしたとしても研究を止めないことを目指す間接的な方略の 2 種があることを明らかにした。そして、言語・技能・基礎・専門の 4 領域での困難に対しては直接的な方略と間接的な方略が使われ、情意面・援助要請・環境の 3 領域での困難に対しては、間接的な方略が使われていたとしている。また、本研究で注目する専門領域の困難に対する対処としては、専門知識を効果的に習得するための符号化制御、効率的に研究を進めるための情報処理制御、研究の意義を明確化するための課題制御が直接的方略として用いられる一方、研究活動継続をサポートするためには、感情を調整する感情制御と、制度や場を利用する場面制御、研究に必要な行動を明確化するための自己教示が用いられたことも報告されている。

このように、大学院留学生が学位論文作成の過程でどのような困難に直面するのか、それらの困難にどう対処するのかということが先行研究から明らかになりつつあるが、研究活動の途中で躓いている学生にとって、とるべき行動(方略)がわかったとしても、その行動をとることを可能にする情意的特性が発達してい

なければ行動できない可能性がある。そこで本研究では、日本語で学位論文を書いた経験のある元大学院留学生にインタビュー調査を行い、小森（2025a）で多様な記述が挙げられていた「専門知識の不足」に焦点を当て、困難への対処としてどのような方略をとったのか（研究課題 1）、そして、その方略の実行を支えた情意的特性とは何であったか（研究課題 2）を 2 名の調査協力者のケーススタディから明らかにすることを目的とする。

2.3 意志的制御方略

本研究では、困難への対処を分析する際に Kuhl（1985）とコーノ（2001／2006）の意志的制御方略を援用する。コーノ（2001／2006）によれば、意志的過程は学習課題を学習あるいは達成しようと決定がなされた後に動き始めるもので、競合する行為傾向や他の潜在的な気を散らす事柄から学習する決意を防御するものである。本研究では、研究の継続が危ぶまれるような困難に陥ったときの対処を分析するため、意志が重要であると考え、この理論を分析枠組みとして使用することにした。

意志的制御方略には、集中力を削がれるようなものから注意を逸らす注意制御、課題の一側面のみ集中して目標を達成しようとする符号化制御、大量の情報を効率的に処理して課題をすばやく遂行しようとする情報処理制御、否定的な感情を制御して課題に従事し続けるようにする感情制御、競合する複数の意図に対して優先順位をつける誘因増大、原因について正確に分析する帰属、自分に対し有効な教示をする自己教示、課題そのものを変える課題制御、課題にいつでも取り組むかを変える場面制御、課題をサポートしてくれる他者の行動を変化させる他者制御などがある。本研究では、専門知識の不足により困難に直面した際に、これらのうち、どの方略が使われたのかを分析する。

2.4 情意的特性

Council of Writing Program Administrators et al.（2011）は、大学でのライティングをサポートするものとして好奇心、開放性、エンゲージメント、創造性、我慢強さ、責任、柔軟性、メタ認知といった思考態度（habits of mind）を挙げている。そして、ライティング、読解、批判的分析などの経験を通してこれらの思考態度を育てることにより、学生たちの修辞学的知識、批判的思考、ライティングプロセス、ライティングの慣習に関する知識、そして、複数の環境におけるライティング能力を発達させることが目指されるとしている。ここから、ライティングに必要な知識や技能や能力の発達のために思考態度を育成する教育が必要とされていることがわかる。また、Driscoll and Wells（2012）は、情意的特性とは知識や技能や適性などの知的特性ではなく、それらの知的特性がどのように用いられ応用されるかを決定するものであるとし、ライティングに影響する特性としては、価値、自己効力感、帰属、自己調整があるとしている。この指摘は、知識や技能などを支えるものとして情意的特性が位置づけられている点で Council of Writing Program Administrators et al.（2011）に共通している。

これらの先行研究を踏まえ、筆者は AW の 4 つの構成要素（二通ほか 2004）の発達を支える要素があり、それが情意的特性であると考え。特に、本研究では、困難に対して書き手が何らかの方略を行おうとする際の思考態度や意思、感情等を情緒的特性と捉え、分析していく。

3. 調査方法

調査協力者は、小森（2025ab）でインタビュー回答への協力を承諾した人のうち、論文執筆過程で最も困難だったことは「専門知識の不足」であったと回答した 2 人である。1 人は中国語が母語、もう 1 人はクメール語が母語で、現在 2 人とも母国で大学教員をしている。インタビュー形式は半構造化インタビューで、学位論文作成過程での専門知識の不足による困難な状況、その困難への対処や工夫、困難を乗り越えた理由をどう捉えているかなどについて質問した。

研究課題 1（「専門知識」の不足という困難への対処としてどのような方略をとったのか）については、①回答を意味のまとまりごとに分割する、②各断片を一般化した言葉で表現する、③②について Kuhl(1985)とコーノ（2001/2006）の意志的制御方略のいずれであったかを特定する、という手順で分析した。研究課題 2（その方略の実行を支えた情意的特性とは何であったか）については、(1)研究課題 1 の分析で分割した各断片について類似例ごとにグループ化する、(2)各グループについて関連すると思われる概念（情意的特性）とその定義を記入する、(3)各概念と意志的制御方略との関係を図示する、という手順で分析した。

4. 分析結果と考察

研究課題 1 は 4.1 で、研究課題 2 は 4.2 と 4.3 で分析結果と考察を述べる。

4.1 「専門知識の不足」に対して使用された意志的制御方略

分析の結果、専門知識の不足を直接的に補う方略（以下、直接的方略）には符号化制御、場面制御、他者制御が、専門知識の不足により研究進捗に躓きがあった場合でも諦めずに論文執筆を進めることを目指す方略（以下、間接的方略）には自己教示、感情制御、場面制御、他者制御が採用されていたことがわかった。

まず、直接的方略について本調査データから得られた例を挙げながら説明する。符号化制御は課題の一側面に集中して達成しようとする方略で、本調査のデータでは、効果的に知識を習得するために、読む観点を決めて文献を読むという方略がとられていた。大学院留学生にとって、母語ではない日本語による専門の文献の読解は時間も労力もかかるものであるため、効果的に自分に必要な知識を得るということを重視してこのような方略がとられていると考えられる。

場面制御は課題を行う場を調整する方略で、本研究のデータの例では、チューター制度やゼミなどの場を利用して専門知識の不足を補おうとする方略が挙げられる。また、他者制御は自分をサポートしてくれる他者の行動を変化させるもので、本調査協力者は 2 人とも、指導教員から助言を得るという方略を多用していた。このように、自分で文献を読み専門知識を習得するだけでなく、制度や場、他者を利用することが直接的方略として採用されていることがわかった。

次に、間接的方略について説明する。自己教示とは自分の言葉で自分に教示を与える方略で、本研究の調査協力者の場合は、自分には学位取得という目的があるのだと言い聞かせ、「中間発表会があるからそこまで何とか」と設定した期限までにすべき行動を自分に向けたり、自身の目的の達成のために「少しずつ」

「時間をかけて」と自分に言葉をかけたりする方略をとっていた。また、否定的な感情を制御する感情制御の例としては、「ここまでがんばったからあきらめるのはもったいない」と自分を励ましたり、指導教員からの「もう少しがんばったらいける」「できるよ」という励ましの言葉を思い浮かべることによって自分を励ましたりするといった方法によって感情を調整していたことが挙げられる。

間接的方略としての場面制御では、ゼミや院生室や授業など複数の場を利用して院生仲間と声を掛け合い慰め合ったり、他者制御としては、指導教員に会いに行き励ましの言葉を得ることで、論文作成を諦めないよう情意面を調整するといった例があった。このように、論文作成過程で何らかの躓きがあっても執筆を継続するための言葉を自分にかけるという方略に加え、複数の場へのアクセスや他者との関係構築を間接的方略としていたことがわかる。

以上から、「専門知識の不足」という困難に対する意志的制御方略には、専門知識を得るための直接的方略と、そのような困難があっても研究継続を諦めない方向へ自分を導く間接的方略があり、前者には文献を使う方法と場面や他者を使う方法が、後者には、自分で自分に言葉を向ける方略と場面や他者との関係構築を利用して情意面を調整する方略があり、これらの方略を組み合わせて使用し、論文完成へと自らを導いていったことが明らかになった。

4.2 意志的制御方略に必要な情意的特性

本項では、4.1で明らかになった「専門知識の不足」に対処する意志的制御方略の実行に必要な情意的特性について述べる。分析の結果、直接的方略に關与する情意的特性には、客観的自己分析力、根気強さ、柔軟性、試行錯誤力、行動力が、間接的方略に關与する情意的特性には、指導教員への信頼、中断しない言葉を見つける力、自己効力感を回復させる力、開放性、好奇心などがあった。まず、直接的方略に關与する情意的特性の定義を、事例とともに説明する。

客観的自己分析力とは、知識が不足している自分を受け入れ、どのような知識が不足しているかを分析する能力である。本調査協力者の2人は、論文作成過程で専門知識の不足による困難に直面するたびに、専門知識の中のどのような知識が不足しているのかを特定し、それに対処する行動をとろうとしていたことがわかった。自分の足りない点を認めその自分を受け入れるということは難しいことであるが、それができると研究を進めていくための出発点となり、根気強さや柔軟性、試行錯誤力、行動力など直接的方略を可能にする情意的特性に関わっていくことが本調査協力者の語りに表れていた。

根気強さとは、時間がかかっても諦めずに先行研究の読解を続けることができる特性である。本調査のデータでは、読むべき文献の目安についてのチューターからのコメントをもとに専門の文献を読み進めていったことや、論文執筆の過程で参照しなければならない論文が出てくれば一旦執筆の手を止め、時間がかかっ

てもその文献を読んだ、といった符号化制御の例がみられた。留学生にとって、日本語での文献読解は時間の面だけでなく精神面でも辛い場合があるが、読むことから遠ざけるような自己内発話をしないことや、読むことを続けるよう自分に言い聞かせることによって符号化制御の実行が支えられていた。また、そのような自己内発話をするためには、自分の知識不足を受け入れ必要な知識は何かを客観的に分析する力が必要であり、これによっても根気強さが支えられていたと考えられる。

柔軟性は、必要に応じて研究の方向性を転換することができる特性である。本調査のデータからは、指導教員からテーマの再設定を求められた際に自らの専門知識の不足や研究に対する認識不足を受け入れ、研究テーマや研究対象を変えていった他者制御の例が挙げられる。指導教員に言われるままに変えるのではなく、客観的自己分析力によって指導教員の言葉の真意を読み取り、その後の進むべき方向性を自分で決定することが、納得した上での方向性の転換につながっており、客観的自己分析力が柔軟性にも影響を与えていることが示唆される。

試行錯誤力とは、他者のやり方を観察したり他者の助言を受け入れたり論文や参考書を読んだりしつつ適切な方向や解決策を見つけるためにさまざまな方法を試す力を指す。本調査のデータでは、先行研究をまとめる際や研究発表の準備をする際に院生室やゼミで院生仲間からの助言を参考にしつつ、「こういう形でいいのか」と客観的に分析し、「探りながら」「少しずつ」さまざまなまとめ方を試行していったことが語られていた。すぐに答えが見つからなくても、試行を通して適切な方法を自分で見つけようとする特性が場面制御や他者制御を支えていることがわかる。

行動力は、援助が必要だと判断した際に指導教員に指導を受けるための約束を取り付け、実際に指導を得るための行動がとれる力である。指導教員との関係性を構築し、論文の内容面での悩みを解決するために、計画的に、複数の手段を使い分け、適切な方法で援助要請できる力を指す。本調査協力者の場合は、指導教員と相談すべき点は何か、相談手段はメールか対面か、相談の頻度はどれぐらいがよいか、事前に資料を送るべきかなどを考えた上で指導教員と会う約束をしていた。このように、相談内容によって指導を得る方法を変えるという他者制御を行う際にも自分の状況を客観的に分析できる力が基礎となっていることがわかる。調査協力者の1人が、研究が思うように進んでいない場合は指導教員に会うことが怖いと感じたが、それでも会いに行くことで指導教員の助言を得ることができ、次にやるべきことが見えてきた、という経験を語っていたように、情意面での壁があっても、すべきことは何かを判断し、すべきことを実際に行動に移せる力が必要であることが読み取れる。

次に、間接的方略に関与する情意的特性の定義と、その例について説明する。指導教員への信頼とは、指導教員の指導や励ましを信頼することができる特性である。本調査協力者の場合は、世界的な感染症拡大の状況下で他者と自由に会えない状態が続く中でも「できる」と背中を押し続けてくれた指導教員や、多忙な中でも時間を割いて自分の書いたものを丁寧に読み細かい点までコメントをつけてくれた指導教員の姿から、頑張らなければと思ったということである。「先生

に会った後は、いろいろ解決できて、ああしたい、こうしたい、こうしたらいいみたいなことができた」「博士論文の構成ってというのが、先生と相談している間にこういうふうには書いていたらいいなっていうふうにしてその構造自体ができあがって、そこから少しずつ埋めていくという感じでした」など、指導を受けた後はどう進めばよいか分かり、改めて研究に向かっていくことができたという語りから、指導教員への信頼が他者制御や自己教示につながっていることがわかる。

中断しない言葉を見つける力とは、書けないかもしれないという不安があっても、すべきことや励ましの言葉を自分に向けることができる力である。自分に学位論文が書けるのかという言語面と時間の面での不安や焦りがある中で、最終的な目的（例えば、学位取得）と短期的な目標（例えば、中間発表会での発表）を確認し少しずつ進めていくようにと自己教示につなげたり、これまでかけてきた時間と労力を考え、信頼している指導教員の「もう少し」という言葉を原動力に論文作成を続けるよう自分を励ます感情制御につなげていた例が挙げられる。

自己効力感を回復させる力とは、自信喪失時に指導教員による励ましを受け取り、もう一度「できる」と思うことができる力である。調査協力者によると、論文作成途中で帰国することになり指導教員から物理的に離れてしまった時期に「離れていても先生からダメとかやめようとか1回も言ったこともない」「先生は、できますというふうに、いつもそればかりおっしゃってくださった」と、指導教員の言葉から、失いそうになる自己効力感をもう一度回復させることができたことが語られた。このように、自信を失った自分がもう一度自信を取り戻すための方法を探ることができる特性も論文作成には必要であることがうかがえる。

開放性とは、研究の悩みを打ち明け、助言し合える他者との関係性を作ることができる力である。ここでの関係性とは、院生仲間で励まし合い、悩みを打ち明け支え合うという関係性である。本調査のデータでは、このような関係性をもとにゼミで研究発表会の準備について意見を言い合ったり、発表会の後で声を掛け合い上手くいかなかったという思いを救ってもらったり、大学の食堂で論文の進捗を話し合ったりなどの場面制御や他者制御の様子が語られていた。研究が順調に進んでいない自分の状況を他者に開示できることが、心理的な落ち込みを和らげるだけでなく問題解決の糸口につながり得ることがわかる。

好奇心とは、自分とは異分野の人や、異なる研究テーマの人との話から研究のおもしろさを見つけられる力である。本調査のデータからは、院生室での別の分野の院生仲間との話から研究するということのおもしろさを改めて発見し、それを自らの研究継続の推進力にしていったという場面制御と他者制御の例が挙げられる。困難な状況になっても研究への意欲を失わないことも、研究継続のために必要な間接的方略といえる。

4.3 「専門知識の不足」に直面した際の意志的制御方略と情意的特性

本調査協力者の2人が論文作成過程のいずれかの段階で「専門知識の不足」という困難に直面した際の意志的制御方略と、それらを支えた情意的特性との関係性を示したものが図1である。矢印は影響を与えた方向を表している。

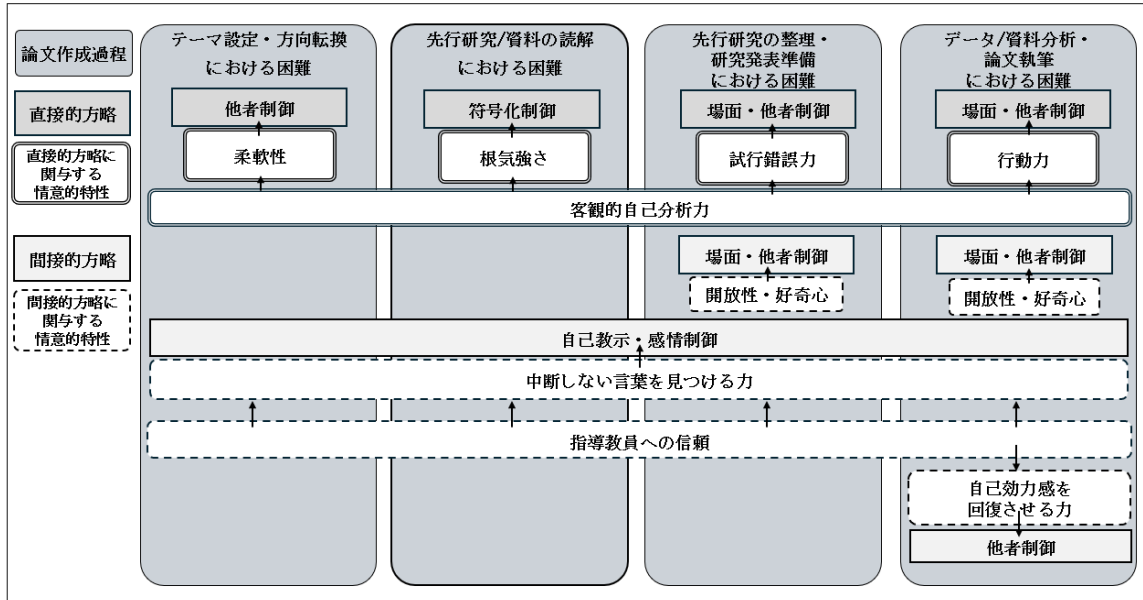


図1 「専門知識の不足」に直面した際の情意的特性と意志的制御方略

大学院留学生が「専門知識の不足」に直面して論文作成が進まなくなった際、まず必要となるのは客観的自己分析力である。専門知識が不足している自分を受け入れ、どのような知識が不足しているのかを特定することができると、知識習得のために他者制御や符号化制御、場面制御などの直接的方略が可能となる。

テーマ設定や研究の方向性で躓きがあった場合は他者制御により指導教員のサポートを得てテーマについて再考し必要であれば方向転換を行う。この際に必要となるのが柔軟性である。この時、研究の方向性の転換を迫られる状況になっても指導教員への信頼があれば、その助言を受け入れ適切に方針の変更をするよう自分に教示を与えることも可能になる。また、研究を中断しないための言葉を見つける力を発揮し、自分を励ますことによって研究を続けることが可能になる。

先行研究や資料の読解で困難に直面した際には効果的な知識習得のために符号化制御を用いるが、この際に求められるのが根気強さである。また、読解を途中で諦めそうになっても読むことを続けるよう、中断しないための言葉を見つける力が根気強さを支えることにもつながる。

習得した専門知識を整理しまとめる段階で躓いた場合には複数の場や制度を利用する場面制御、院生仲間など他者を利用する他者制御を行うが、この方略を用いる際には適切な解決方法を見つけるための試行錯誤力が求められる。同様に、研究発表の準備の際にも発表資料のまとめ方について試行錯誤力が必要となる。この時、同時に、研究進捗に躓いている自分の状況を院生仲間に表示する開放性や、行き詰まっても研究することのおもしろさを見出し続ける好奇心が間接的方略としての場面・他者制御を支え論文筆作成を諦めないようにしつつ、直接的方略としての場面・他者制御にも影響を与え、専門知識の不足を補っている。

データ分析や資料分析、論文執筆の段階で行き詰まった際にも、場面制御と他者制御を用いる。この時、指導教員に指導を受ける約束を取り付けるための行動力が必要となる。そして、この行動力を後押しするものとして、指導教員への信

頼に加え、院生仲間同士での励まし合いを支える開放性や好奇心が必要となると考えられる。また、躓いても分析や執筆を続けるよう、中断しないための言葉を見つける力も試行錯誤力や行動力を支えている。さらに、途中帰国により論文執筆への自信を失った際にも、指導教員の励ましを得て自己効力感を回復させ、論文を完成させる調査協力者もいた。

以上みてきたように、論文作成過程全体のうちのいずれかの段階で研究の進捗が滞った際には、中断しない言葉を見つける力が必要となる。また、本調査では論文執筆の段階で自己効力感を回復させる力がみられたが、この力は、論文作成過程のいずれの段階においても自信喪失時に必要とされるものであろう。本調査協力者の場合、この2つの特性はいずれも指導教員の励ましを受けることが原動力になっており、指導教員への信頼が論文作成過程全体を支える重要な情意的特性であることが示唆された。現在大学教員をしている2人が「自分の指導教員みたいに学生に接したい」と思っていると語った言葉からも、指導教員への強固な信頼関係が構築されていたことが読み取れる。

フィリップス&ピュー（2015/2018）は、研究指導において学生の助けになる「心のつながり」を維持することが重要であるとしている。また、「指導」に対する定義が学生と教員とで異なる場合、学生は良い指導を受けられていないという感情を持ちやすいため胸襟を開いて話し合うことが重要だとも述べている。このように、研究指導を担当する指導教員が大学院留学生とのコミュニケーションを丁寧に行い適切な関係性を構築することが、大学院留学生の論文作成を後押しする重要な要因となる可能性があるといえるだろう。

5. 結論と今後の課題

本研究の結果、「専門知識の不足」という困難に直面した大学院留学生がとる方略には直接的な知識獲得のための方略と間接的に知識習得をサポートする方略があり、前者を支える情意的特性は、客観的自己分析力、柔軟性、根気強さ、試行錯誤力、行動力が、後者を支える情意的特性は、指導教員への信頼、中断しないための言葉を見つける力、自己効力感を回復させる力、開放性、好奇心があるとわかった。また、客観的自己分析力はすべての直接的方略を支える情意的特性であること、指導教員への信頼は、論文作成過程全体を支える情意的特性であることが示唆された。

本研究は「専門知識の不足」が論文作成上最も困難であったとする2人の調査協力者のインタビュー調査から得られたケーススタディである。本研究が大学院留学生のためのライティング教育の一助となるよう、今後は調査協力者を増やし、他の領域での困難への対処に求められる情意的特性についても明らかにするとともに、各情意的特性の定義をより精密なものにすることと、情意的特性と意志的制御方略との関係図を整理していくことが課題である。

付記 本研究は JSPS 科研費 JP24K03978 の助成を受けています。また、本稿は 2025 CAJLE 年次大会の口頭発表をもとに執筆したものです。大会当日、質問やコメントをくださった皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 郭菲 (2019) 「日本の大学院の実践共同体に参加する初期段階における学習過程—ある中国人留学生のインタビュー調査から得た理解—」 『阪大日本語研究』 31, 17-47
- 鹿毛雅治 (2013) 『学習意欲の理論—動機づけの教育心理学』 金子書房
- 胡芸群 (2016) 「大学院で学ぶ留学生の研究に対する考え方に関する一考察—PAC分析による事例研究—」 『一橋日本語教育研究』 4, 117-125
- コーノ リン (2001), 塚野 州一 (編訳) (2006) 「自己調整学習の意思的側面」 ジーマーマン B. J.& シャンク D. H. (編著) 『自己調整学習の理論』 第6章, 189-224, 北大路書房
- 小森万里 (2025a) 「大学院留学生の論文執筆過程における困難—学位論文を書いた経験のある学習者への調査をもとに—」 『日本語・日本文化』 53, 37-62
- 小森万里 (2025b) 「アカデミック・ライティングにおける日本語学習者の意志的制御方略—学位論文を書いた経験のある学習者への調査をもとに—」 第64回アカデミック・ジャパニーズ・グループ定例研究会 発表資料 (2025年2月22日)
- 後藤大輔・平松友紀・千仙永・坂本麻裕子・佐渡島紗織 (2024) 「大学院生が抱えるアカデミック・ライティングの課題—得意・不得意についての21名の語りから—」 『専門日本語教育研究』 26, pp.19-26
- 園田智子 (2009) 「大学院留学生の研究生活における困難度とその関連要因—理系と文系の際に注目して—」 『異文化間教育学』 29, 64-76
- 田佳月 (2019) 「中国人留学生の学術レポート執筆不安とその変化—学習背景の違いに着目して—」 『専門日本語教育研究』 21, 53-60
- 二通信子・大島弥生・山本富美子・佐藤勢紀子・因京子 (2004) 「アカデミック・ライティング教育の課題」 『日本語教育学会春季大会予稿集』 285-296
- 黄均鈞 (2015) 「ゼミ新参者のゼミへの参加意識の変化に関する事例分析—ある中国人大学院留学生へのPAC分析から見えてきたもの—」 『日本語学研究と資料』 38, 1-13
- 馬場美穂 (2019) 「外国人留学生の大学院学術場面への参加過程分析—2年間の日本語によるゼミナールを中心に—」 『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』 11, 46-54
- フィリップス, E.M. & ピュー, D.S. (2015) 角谷快彦訳 (2018) 『博士号の取り方—学生と指導教員のための実践ハンドブック』 名古屋大学出版
- Council of Writing Program Administrators, National Council of Teachers of English, & National Writing Project. (2011) *Framework for success in postsecondary writing*. https://wpaouncil.org/aws/CWPA/asset_manager/get_file/350201?ver=7548
- Driscoll, D. L., & Wells, J. (2012). Beyond knowledge and skills: Writing transfer and the role of student dispositions, *Composition Forum*. 26, 1-15.
- Kuhl, J. (1985). Volitional mediators of cognition-behavior consistency: Self-regulatory processes and action versus state orientation. In J. Kuhl & J. Beckmann (Eds.), *Action control: From cognition to behavior* (pp.101-128). West Berlin: Springer-Verlag.